建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

31
JULY
2024

特集

建築のまちを旅する 19

盛岡

日本の近代建築黎明期の
先駆地に見る、
葛西萬司の足跡

JULY 2024
no.31

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

〈岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）〉のドーム屋根

設計｜辰野葛西事務所

辰野金吾と葛西萬司が共同で設計した旧盛岡銀行本店。赤煉瓦と白色花崗岩の対比が鮮やかな外壁、コーナー部にドーム屋根を有する外観などは「東京駅」と見紛うが、竣工は1911（明治44）年で、こちらのほうが東京駅より先にできている。葛西が盛岡出身であることから生まれた建物だ。2012（平成24）年まで銀行建築として使われ、現役の銀行建築として初めて国の重要文化財にも指定された。現在は通称「岩手銀行赤レンガ館」として、盛岡のまちを象徴する存在だ［写真：小松正樹］

左写真

〈岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）〉内部のロビー

設計｜辰野葛西事務所

盛岡銀行本店の内部は営業室を中心に、道路に面した南側と東側にロビーを配し、ロビーと営業室は吹き抜け。2階に回廊を巡らせている。大理石のカウンターから天井に延びる木製の飾り柱、欄間部分や窓上部に施された装飾、天井の石膏モチーフなど、豪華な内装が明治期の銀行建築の姿をいまによく伝えている。欄間の木彫装飾の一部には、船の操舵のような形状が見られる。この建物の敷地にはかつて舟運業の会社があり、旧盛岡銀行はそのメンバーが中心となって創設されたことから、船をモチーフにした意匠を採り入れたのではないかといわれている［写真：小松正樹］

LIXIL eye no.31
2024年7月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜對馬儀昭
LIXIL Housing Technology
営業本部 TH統括部
〒141-0033
東京都品川区西品川1-1-1
大崎ガーデンタワー 24階
Tel: 050-1790-5838
Fax: 03-4363-6434
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

訂正とお詫び
本誌no.30の「触覚デザイン」48ページの略歴の一部に誤りがありました。正しくは、下記の通りです。
誤：早稲田大学理工学部建築学科卒業。1919年大学卒業と同時に同大の助手に任命され、翌年、助教授に就任。
正：1919年早稲田大学理工科建築学科卒業。同年、同大学助教授に就任。
訂正の上、お詫びいたします。

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜19**
盛岡

06 **テーマ1**
日本の近代建築黎明期の先駆地に見る、葛西萬司の足跡
ナビゲーター｜佐藤竜一

11 旧南部家別邸（現・盛岡市中央公民館別館）／岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）／旧盛岡貯蓄銀行（現・盛岡信用金庫本店）／盛岡聖堂孔子廟

15 **テーマ2**
地域と結び付いた文学者 宮沢賢治の生涯をたどる旅

18 盛岡建築めぐり

24 **住宅クロスレビュー｜19**
土
鈴木亜生「LOAM」×**佐野哲史・稲垣淳哉**「あざみ野の土」

34 **建築家の〈遺作〉｜16**
木村俊彦「八代市立博物館 未来の森ミュージアム」
（意匠設計：伊東豊雄建築設計事務所）
談｜久田基治

38 **新世代・事務所訪問｜19**
佐藤研吾建築設計事務所
ナビゲーター｜門脇耕三

46 **構造家の新発想｜19**
CLTはタテて使う
萩生田秀之

48 **触覚デザイン｜16**
林昌二の手すり・ドアハンドル
ナビゲーター｜笠原一人

52 **土木のランドスケープ｜19**
アプトの道
ナビゲーター・文｜八馬 智

58 **TOPICS**
CAD・BIMデータサイトがリニューアル
文｜LIXILマーケティング部門 商品コンテンツマネジメント統括部 UX Strategy＆Design ソリューション企画G CADT

60 **INFORMATION**
LIXILビジネス情報サイトのご案内／LIXILからのご案内／展示のご案内

64 **紙上の建築｜19**
《Land & Water》
杉山幸一郎

盛岡

盛岡にいま世界が注目している。
いわゆる観光地化されていない、日本の歴史や暮らしを体感できる文化のまちとして。
建築ももちろんそのひとつ。誰もが訪れる岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）は近代盛岡の象徴で、
東京駅と同じ辰野葛西事務所の設計だ。辰野金吾の名が先立つが、共同設計者の葛西萬司は盛岡出身。
今回は、盛岡建築の巨匠・葛西萬司の近代建築を中心に見てゆく。
一方で盛岡の建築は、近代洋風建築のほかに歴史的な町家も遺されている。
近年の保存運動の賜で、鉈屋町界隈はぜひ立ち寄りたい場所だ。

岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）を南西側から見る。中津川沿いの敷地に立ち、手前の道路を左手に進んだ先に中の橋があり、川を越えると盛岡城跡だ。今も昔も盛岡の中心部に位置するとともに、この建物周辺はかつて金融街だった。角地という敷地条件を活かした優れた構成で、ランドマークとしての効果は大きい。また、近代建築保存のモデルケースとしても注目されている［写真：小松正樹］

テーマ1

日本の近代建築黎明期の先駆地に見る、葛西萬司の足跡

取材・文｜長井美暁
写真｜小松正樹（特記以外）

ナビゲーター｜**佐藤竜一**（岩手大学非常勤講師、ライター）

日本近代建築の父・辰野金吾の右腕として、東京駅をはじめ数々の建築に携わった葛西萬司。謙虚で自己主張することがほとんどなかったと語られる葛西の功績は、辰野の陰に隠れがちだが、彼がいなければわが国の建築の発展はなかっただろう。葛西が携わった建築は東京以外では故郷の盛岡に多く、25件が確認され、うち8件が現存する（部分的なものを含む）。『建築家・葛西萬司――辰野金吾とともに東京駅をつくった男』を2023年に上梓した岩手大学非常勤講師の佐藤竜一氏とともに、盛岡に残る葛西の足跡を訪ねた。

葛西萬司
かさい・まんじ

1863（文久3）年に盛岡で生まれる。12歳か15歳のころに上京。1890（明治23）年に帝国大学工科大学造家学科を卒業し、日本銀行技師となる。1903（明治36）年に恩師の辰野金吾とともに辰野葛西事務所を立ち上げる。1914（大正3）年に中央停車場（現・東京駅）竣工。辰野が1919（大正8）年に亡くなったあとは、田中實と共同経営した10年間を除いて単独で設計事務所を経営。1942（昭和17）年に東京の自宅で逝去。享年80歳。墓所は盛岡にある
［提供：盛岡市先人記念館］

アメリカのニューヨーク・タイムズ紙は毎年1月、世界各地から選び出した52カ所を、その年に行くべき旅行先として発表している。2023年の記事で盛岡が選ばれたことは大きな話題を呼んだ。推薦者は「市街地は街歩きにとても適している。大正時代に建てられた西洋と東洋の建築美が融合した建造物、（中略）蛇行して流れる川などの素材にあふれる」と紹介した。

盛岡には、辰野金吾と葛西萬司が共同で設計を手がけた「岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）」（12ページ参照）があり、まちのシンボル、また代表的な観光スポットとして知られている。「西洋と東洋の建築美が融合した建造物」は、きっとこの建物を指すに違いない。市街地の中心部に位置し、駅からは徒歩30分弱の距離だ。盛岡は歩いて楽しむのがよいというニューヨーク・タイムズ紙の勧めにのってみよう。

“石好き”な宮沢賢治も気に入っていた建物

一関市に住むナビゲーターの佐藤竜一氏と盛岡駅で待ち合わせ、市街地に向かう。その途中、北上川に架かる橋の上から左手に岩手山がよく見えて、まず足が止まる[01]。この山は大きく裾野を広げ、どっしり穏やかに構える姿が富士山に似ていることから「南部富士」の別名をもつ。山を望んで手前に川が流れる構図が絵になり、思わず写真に収めたくなるのは観光客だけではないようで、橋の上では市民もスマートフォンのカメラを向けている。

北上川も市民に親しまれている。秋には鮭が太平洋から遡上し、夏は鮎が釣れ、冬は白鳥が飛来し羽を休めるという。

さらに歩みを進め、盛岡城跡公園を右手に見ながら通り過ぎ、中津川を渡ると、すぐ左手に目的の建物がある。中津川に架かる橋と一体となって景観を形成しているのが好ましい。「この中津川にコンクリートの堤防をつくろうという動きがあったのですが、市民の反対運動により阻止されました」と佐藤氏。1956（昭和31）年のことだ。そして1971（昭和46）年、市は自然環境条例を制定し、1976（昭和51）年、この条例に「歴史的環境の保全」が加えられ、岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館が市の保存建造物第1号に指定された。

佐藤氏は「盛岡に葛西萬司などが手がけた歴史的建造物が多く残ったのは、市民の環境問題に対する意識の高さのおかげだと思います。私は東京に住んでいたときに建築雑誌の編集記者をしていて、取材で全国のまちを見て回りましたが、盛岡ほど古い建造物が周囲の風景と調和しつつ存在するまちは、それほど多くありません」と語る。

1911（明治44）年に竣工した旧盛岡銀行本店の建物は、1936（昭和11）年に岩手殖産銀行（現・岩手銀行）が譲り受けて同行の本店となり、本店の新築移転に伴い中ノ橋支店となったあとも、2012（平成24）年まで現役だったというから驚く。1994（平成6）年には現役の銀行建築として初めて国の重要文化財に指定された。

この建物は東北地方で唯一残る辰野の作品だ。赤煉瓦と白い花崗岩の対比が鮮やかな外壁、コーナー部にドーム天井がある。佐藤氏は宮沢賢治の研究家でもあり、「盛岡高等農林学校で土壌学を専攻した宮沢賢治は『石っこ賢さん』と呼ばれた石好きで、この建物も気に入っていました」という。

しかしこの姿形には見覚えがある。そう、同じく辰野・葛西コンビの設計による東京駅にそっくりなのだ。ただし東京駅の竣工は3年後の1914（大正3）年。佐藤氏は「辰野と葛西は東京駅を完成させる前に、この建物でさまざまな試みを行ったと推測できます。いわばプロトタイプのようなところがあったのではないでしょうか」と話す。

辰野葛西事務所に旧盛岡銀行本店の設計依頼があったのは、葛西の養父の縁による。養父は古河鉱業の重役を務め、盛岡の経済界に大きな影響力を有していた。古河鉱業は旧・古河財閥の源流企業だ。

養父の支援で上京、進学。そして辰野との出会い

佐藤氏の著書と、2013（平成25）年に盛岡市先人記念館で企画展「葛西萬司」が開催されたときのパンフレットを参考に、葛西の生涯や人となりを追ってみよう。

葛西は1863（文久3）年に、盛岡藩士・鴨澤舎とコノ夫妻の次男・鴨澤萬司として生まれた。翌年に母が他界し、父は後妻を迎えたが、4年後に父も他界。

時代は明治維新の動乱期だ。戊辰戦争で奥羽諸藩とともに新政府軍に敗れた盛岡藩は賊軍の烙印を押され、藩主は隠居謹慎し、多額の賠償金を政府から科せられたあげくに廃藩。鴨澤家は父の後妻と、萬司を含む4人の幼い子どもたちとでこの苦難の新時代を迎えていたわけだが、旧藩士族の親戚たちが一家を支えていたと推測されるという。そのなかで一族を牽引したのが葛西家7代目の若き当主・重雄[02]だった。萬司の兄・鴨澤慎の妻の兄であり、のちに萬司の養父となる人物だ。

14歳上の重雄は、萬司にとって兄のような存在だっただろう。萬司は12歳（一説には15歳）で上京し、慶應義塾を経て1886（明治19）年、第一高等中学校（現・東京大学教養学部）に一期生として入学。そのあと帝国大学工科大学造家学科（現・東京大学工学部建築学科）に進学して辰野に学び、1890（明治23）年に卒業した。その前年には25歳で重雄の養嗣子となり、さらに重雄の妻の妹と結婚。立て続けに行われたこの縁組みは、ほぼ重雄の意見によるものだったらしい。「重雄は盛岡経済界の重鎮で、三田義正や三田俊次郎[03]といった地元の有力者とともに原敬[04]の選挙を支えた人でもありました。そうした人脈があったことから、萬司はのちに盛岡で大きな仕事ができたのです」と佐藤氏が話す。

葛西萬司は大学卒業後、辰野が設計監督を務める日本銀行の技師となり、辰野の片腕として同行本店や大阪支店の設計に携わった。彼が建築の世界に足を踏み入れた明治中期は、日本の建築界が急速に発展しはじめた時期で、それを牽引した辰野は葛西の9歳上だった。葛西は日本銀行に10年ほど勤めたのち、帝国大学工科大学長を辞任した辰野とともに1903（明治36）年、辰野葛西事務所を開設。辰野がどれほど葛西を頼りにしていたかがうかがえる。

辰野葛西事務所では、主に辰野が設計図の作成を担当し、仕様書や予算書の作成といった事務的な面を葛西が担当したといわれる。葛西はいわば、辰野の輝かしい業績を陰で支える役を引き受けていたわけだが、単なる引き立て役ではない。建築の芸術性ばかりが重視されがちな時代にあって、彼はいち早く経済的観念の重要性を訴えた稀有な建築家だった。建築学会で「建築の経済に就て」という演説を行ったり（『建築雑誌』第221号収録、明治38年）、『建築雑誌』第268号（明治42年）に「予算数量書は之を受負者に示さざるべからず」という論を発表したりしている。

葛西の人柄は辰野と比較して語られる場合が多く、「辰野を厳父とすれば、葛西は慈母のごとく」といわれるように、厳格で動的な辰野に対し、葛西は温厚かつ静的で、辰野の激しい叱責を受けた弟子たちを葛西が優しく慰めるという光景が事務所では日常茶飯事だったらしい。また、辰野の雷も葛西にだけは落ちなかったというから、よほど信頼されていたと見える。辰野が1919（大正8）年に没するまでふたりのパートナーシップは続いた。辰野葛西事務所の建築実績は、辰野の没後に発行された『工學

01｜北上川から岩手山を望む
上写真／県内最高峰の岩手山は北上川とともに市民の原風景にある。いまは清流の北上川も、かつては旧松尾鉱山から流れ出た強酸性水によって濁り、魚が棲めない時代があった。関係者の努力で清らかな流れを取り戻し、いまも守られている

02｜葛西重雄
葛西萬司の養父（1849–1925）。盛岡藩士の家に生まれ、藩校で学んだのち、藩主・南部利剛に小姓として仕える。戊辰戦争後は盛岡と京都を拠点とする豪商・小野組の幹部だった古河市兵衛の下で働くようになり、秋田の古河阿仁鉱山事務所長などを歴任し、次第に岩手の経済界でリーダーシップを発揮するようになる

03｜三田俊次郎
医師・教育者（1863–1942）。盛岡藩士の家に生まれ、甲種岩手医学校を卒業後、東京帝国大学医学部選科で眼科学を学び、盛岡で眼科医院を開業。1897（明治30）年、空いていた県立岩手病院の建物を借り受けて私立岩手病院を、1901（明治34）年には私立岩手医学校を創設。盛岡に医学校を置くことの必要性を早くから説いていた三田は、1928（昭和3）年に文部省（当時）の認可を得て、岩手医学専門学校（現・岩手医科大学）を設立し、初代校長に就任。岩手サナトリウム（結核療養所）や岩手保養院（精神科病院）も設立した

04｜原 敬
盛岡出身の政治家（1856–1921）。新聞記者を経て外務省に入省し、外交官などを務めたのち、政界に進出。1918（大正7）年に総理大臣に就任。爵位をもたなかったことから「平民宰相」と呼ばれた

05｜岩手病院診療棟（現・岩手医科大学1号館）、岩手医学専門学校附属医院（現・岩手医科大学2号館）

前者は1926（大正15）年に竣工。院主・三田俊次郎たっての希望で鉄筋コンクリート造。外観・内観とも装飾性はなく、機能的かつ構造的な設計。丸柱や楕円柱、四角い柱梁の角の丸み、多角形的な螺旋状の階段、アーチをもつ縦長の窓に時代性をとどめる。後者は岩手病院診療棟の北隣に接続し、1932（昭和7）年に竣工。乗用エレベーターが設置されている

岩手病院診療棟（現・岩手医科大学1号館）前にて佐藤竜一氏
［写真：編集室］

博士　辰野金吾傳』によると、主なものだけでもその数は120件に及ぶ。

「葛西にとって辰野はもう一人の父でもあったから、葛西は補佐役に徹していたのでしょう。元来謙虚で自己顕示欲が少ない性格だったせいもあると思います。辰野亡きあと、重しがとれたかのように建築をつくりはじめ、その舞台はもっぱら盛岡でした」と佐藤氏。辰野の没後、葛西は単独で設計事務所を続け、1927（昭和2）年からの10年間は、やはり辰野の教え子である田中實と組んで葛西田中建築事務所を経営。1937（昭和12）年から再び単独の設計事務所を、1942（昭和17）年に他界するまで営んだ。田中は旧盛岡銀行本店完成の1年後に竣工した、佐賀県唐津市の「唐津銀行本店」（LIXIL eye no.16参照）を辰野とともに設計した人物だ。葛西と田中の違いは細部に表れ、旧盛岡銀行本店のほうがより繊細で優美に感じる。

葛西だけではなく佐藤功一や横濱勉の作品も

葛西の意匠性の高さは、旧盛岡銀行本店の斜向かいに立つ「旧盛岡貯蓄銀行（現・盛岡信用金庫本店）」（13ページ参照）でより強く実感できるだろう。現役のこの建物は葛西の単独設計により、1927（昭和2）年に竣工した。主体構造は、盛岡でも大正末期から昭和初期に現れはじめた鉄筋コンクリート造。石彫りで飾られた花崗岩の壁面と正面の列柱が荘厳な印象を与え、ギリシャ・ローマの古典様式を思わせるが、よく見るとデザインが新しい。柱頭の形状は類を見ないもので、陸屋根を含めて立方体を積み上げていくような全体の構成は、20世紀初頭の近代建築の手法の影響が強いと分析されている。

内部の印象は外部の質実なデザインとは対照的に華やかで、随所にアール・デコの影響がうかがえる。この建物が建つ直前の1925（大正14）年にフランス・パリで開催された装飾美術博覧会で一世を風靡したデザイン様式だ。それだけではなく、暖房設備や窓のスチールサッシなども当時の最先端の形式を設けている。竣工時の葛西は64歳で円熟期にあり、彼の代表作といえる建物だ。

葛西が携わった建築は盛岡で25件確認されており、旧盛岡銀行本店と旧盛岡貯蓄銀行のほかに、「旧南部家別邸（現・盛岡市中央公民館別館）」（11ページ参照）、「岩手病院診療棟（現・岩手医科大学1号館）」、「大慈寺宝物庫（現・経蔵）」（23ページ参照）、「岩手医学専門学校附属医院（現・岩手医科大学2号館）」、「盛岡聖堂孔子廟」（14ページ参照）、そして「岩手中学校校舎」の講堂の6件が現存する。日本で2番目、東北初の劇場建築だった木造3階建ての「盛岡劇場」や、盛岡初の洋風商業施設で東北初の自動式シャッターを設置した「榊呉服店」、商業施設として盛岡で初めてエレベーターが導入されるなど最先端のビルとして市民を驚かせた「松屋デパート」などは解体された。また、銀行建築でも「岩手農工銀行」や「岩手銀行本店」は残っていない。

岩手病院診療棟と岩手医学専門学校附属医院[05]は城跡公園の近くにあり、旧盛岡銀行本店から歩いて行ける。前者は1926（大正15）年に、後者はその6年後に竣工。附属医院の完成で、名実ともに近代的な最新医療・医学の拠点が整備された。岩手の近代医学・医学教育史と、歴史様式から近代建築へ変わろうとする建築史を同時に刻むこの2つの建物は「時代の証人として貴重である」と『盛岡の洋風建築』に記されている。

ところで、葛西が活躍した時代の盛岡では、他にも注目すべき建築がある。ひとつは「岩手県公会堂」[06]、もうひとつは「旧第九十銀行本店本館」だ。

岩手県公会堂の設計を手がけたのは佐藤功一[07]で、1927（昭和2）年の竣工。宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』に「金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏に」というくだりがあるが、そのモチーフとなった公会堂だ。東京の日比谷公会堂に似ているのは設計者が同じだからという理由だけではないだろう。日比谷公会堂の竣工は岩手県公会堂の2年後になるため、佐藤氏は「佐藤功一も岩手県公会堂でさまざまなことを試したのでしょう」と推測する。こうして見て行くと、盛岡は近代建築黎明期の先駆地だったことがわかる。

旧第九十銀行本店本館は、現在は「もりおか啄木・賢治青春館」[08]として郷土を代表する作家の石川啄木と宮沢賢治の足跡を展示する記念館となっている。旧盛岡銀行本店と旧盛岡貯蓄銀行から200mほどの距離だ。「このあたりは金融街だったんです」と佐藤氏が教えてくれた。旧盛岡銀行と旧第九十銀行はライバルで、旧盛岡銀行が本店の建設を計画し、その設計を辰野葛西事務所に依頼した動きに対し旧第九十銀行は、盛岡出身で葛西と同じく帝国大学造家学科に学び、当時は東京市の技師だった横濱勉[09]を口説き落とし、旧盛岡銀行本店より一歩でも先にと本店建設を進め、旧第九十銀行は約2カ月早く起工し、約5カ月早く竣工。激しい競争心が、日本の建築史に残る本流ともいえる2つの洋風建築を盛岡に生み出したというわけだ。

盛岡にはなぜ、これだけの近代建築が残っているのだろう。そう思っていたところ、青春館の坂田裕一館長から、故・渡辺敏男氏[10]の存在を教えてもらった。渡辺氏は盛岡の歴史的建造物を活かしたまちづくりなどに尽力した人で、旧第九十銀行本店本館の青春館への改修設計も手がけている。

この改修設計では利活用の工夫が随所に施された。1階営業室にカフェを併設したほか、建物の理解を促すため、2階床の丸鋼と木の混構造梁が覗ける点検口を設けたり、仕上げを一部除いた煉瓦積みの壁内部を展示したり、“裏を見せる仕掛け”を導入。一方でロゴ入りの看板は裏口に設置し、表から見えないようにして既存建物の価値を尊重。これらの改変を加えたあとに、国の重要文化財に指定された意義は大きく、保存と利活用のバランスをとっている。渡辺氏は「旧盛岡高等農林学校本館」（関連16ページ）の改修設計も担当し、この仕事を機に、妻の出身地である盛岡に移住したという。また、岩手県公会堂の保存運動にもかかわった。

葛西を再評価する機運の高まり

葛西の話に戻ろう。現存する葛西作品のうち最も古い1908（明治41）年竣工の旧南部家別邸と、1936（昭和11）年竣工の盛岡聖堂孔子廟は中心市街地から少し離れている。前者は辰野葛西事務所の設立まもない時期に計画が始まった。南部家は旧盛岡藩主で、この仕事も養父・重雄のおかげでかかわったと推測される。

木造平屋のこの建物は御用大工の戸澤甚太郎が設計し、葛西が監修を担当した。全体は本格的な数寄屋造で、式台のある格式の高い玄関の隣に洋室を備えた和洋折衷だ。「盛岡出身で南部家顧問の原敬が、将来の自動車使用に備えて、門から玄関までを広く取ることを提言しています」と佐藤氏。

原は葛西の長女の婚姻に際し仲人を務め、葛西は原夫妻の位牌を納める位牌堂[11]を設計している。原は総理大臣在任中の1921（大正10）年に東

06｜岩手県公会堂

上写真／昭和天皇（皇太子時代）のご成婚記念事業の一環として1927（昭和2）年に竣工。経緯は不明だが、佐藤功一が設計を手がけた。県内で初めて蒸気暖房や水洗トイレなどを採用し、東北随一の近代的建物と喧伝された。主体構造は鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造。外観は塔屋を中心に左右対称で、垂直線を強調した外観からネオ・ゴシック様式と評価されている。外壁はスクラッチタイル張り、装飾にテラコッタを使用。内部はアール・デコを基調とした意匠だ

07｜佐藤功一

建築家（1878–1941）。早稲田大学建築学科の創始者として知られるほか、設計を手がけた建物は「早稲田大学大隈記念講堂」や「日比谷公会堂・市政会館」、「群馬県庁舎」、「滋賀県庁舎」など多数。栃木県に生まれ、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、三重県技師や宮内省内匠寮御用掛。1909（明治42）年、早稲田大学に迎えられ、建築学研究のため欧米留学後、建築学科教授になった

09｜横濱 勉

建築家（1878–1960）。盛岡生まれ。東京帝国大学工科大学建築学科卒業後、東京市営繕課、司法省に勤務。「旧第九十銀行本店本館」は司法省時代に設計した。戦後は盛岡に戻り、岩手県建築士会初代会長を務めたこともある。岩手公園内に残る南部中尉銅像の台座の設計や、盛岡中学校の設計監修なども手がけた

10｜渡辺敏男

建築家（1951–2017）。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。盛岡設計同人代表や盛岡まち並み塾事務局長などを務めた。盛岡市が発行する『盛岡の洋風建築』の著者

08 | 旧第九十銀行本店本館
（現・もりおか啄木・賢治青春館）

上写真／横濱勉の設計により1910（明治43）年に竣工。煉瓦造の2階建て、一部地下1階で、床と屋根は木造。外観はドーマー窓をもつ天然スレートと銅板葺きのマンサード屋根を基本とし、避雷針をフィニアルに見立て、尖り屋根を高く寄せている。外壁は煉瓦積みの上に黄褐色の化粧煉瓦を積み、花崗岩で3層に分節。1階正面入り口まわりはロマネスクアーチをもち、2階の二連アーチ窓、コーナー石に荒々しい割り肌の花崗岩を積み、中世的な優しさと威厳をもたせている。全体の印象はドイツを中心に歴史的様式から分離したセセッションの影響を受けており、盛岡銀行本店がイギリス風の意匠であるのと好対照といえる。「もりおか啄木・賢治青春館」として開館したのは2002（平成14）年。その2年後に国の重要文化財に指定された。なお正面の銀行名銘板は渋沢栄一の筆跡で、改修時に設置された

11 | 原家位牌堂

1924（大正13）年に大慈寺境内に竣工。鉄筋コンクリート造で、インドの墳墓を模した形や、仏像を象った煉瓦を外壁に張り巡らせるなど斬新なデザインが話題を呼んだ。1984（昭和59）年に解体

佐藤竜一 さとう・りゅういち
1958年岩手県陸前高田市生まれ。法政大学法学部卒業。日本大学大学院総合社会情報研究科修了。東京での編集者・記者生活を経て帰郷。郷土出版物の編集を経て、岩手大学特命准教授や宮沢賢治学会イーハトーブセンター副代表理事などを歴任。現在は岩手大学非常勤講師兼ライター。『建築家・葛西萬司――辰野金吾とともに東京駅をつくった男』（日本地域社会研究所）ほか、著書多数。

長井美暁 ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

京駅で暗殺され、妻も翌々年に他界。位牌堂は、菩提寺である大慈寺に建立され、1927（昭和2）年にはその境内にやはり葛西の設計による宝物庫も建造され、これは現存する。

一方、盛岡聖堂孔子廟は盛岡藩の藩校に祀られていた孔子像を奉安する堂だ。和漢折衷のデザインで、葛西の幅広いデザイン力がうかがえる。

廟堂は現在、この建設運動を立ち上げた瀬山陽吉の孫の瀬山輪純氏が個人で管理している。廟堂がある場所は元・葛西館（かさいだて）、つまり葛西氏の居城跡の埋蔵文化財包蔵地区だ。この葛西氏はおそらく葛西萬司の先祖に当たるという。周辺を歩いていると石積みがまだ残っている。

盛岡は実は花崗岩の産地で、石材の調達が容易なことから、盛岡城にも壮大な石垣が築かれた。石垣の城は西国で発達したから、東北や東日本で総石垣の城は少ない。盛岡聖堂孔子廟の近くにも石切り場があり、聖堂の基壇はそこで採れた白色花崗岩を用いている。旧盛岡銀行本店や旧盛岡貯蓄銀行、旧第九十銀行に使われている白色花崗岩も、このあたりから切り出されたものが多いようだ。葛西を追って少し郊外まで足を延ばしたら、意外なことを知ることとなった。

葛西のデザインは、辰野という強烈な存在に隠れて、これまで表立ってはほとんど評価されてこなかった。没後、自宅が戦災や火災に遭って資料が残っていないことが大きな要因だが、自分のことをあまり語らないという性格に起因する部分も多分にある。実兄の鴨澤恒が「何しろ無口で筆不精で御世辞下手な男」と書き残している。

しかし真面目一方だったわけではなく、ユーモアを解し、茶目っ気もあった。また、多趣味でもあり、“家一軒建つほどの金額をつぎ込んだ”という葉巻、朝夕の散歩、釣り、京都旅行、観劇、造園、絵画の鑑賞や制作など多岐にわたった。散歩の行き先は主に銀座で、ハイカラなまちの名店を知り尽くしていたという。社交嫌いではあったが代わりに家族と過ごす時間を大切にし、プライベートの外出にはいつも家族を伴い、「博士、夫人、令嬢の水も漏らさぬ三位一体は人の羨むところであつた」と、辰野の子息で仏文学者の辰野隆が追悼文に綴っている。ちなみに葛西が息を引き取った東京・中里の家は、養父母を迎えるために建てたものだった。母屋はもともとあった農家の骨組みを使った和風の家だったが、そこに煉瓦造の洋館を増築。葛西はいずれ洋間が日本に入ってくると見て、実験的なデザインを試みていたという。養父が亡くなったあと、葛西はその家に移り住んでいた。

盛岡が世界から脚光を浴び、旧盛岡銀行本店をはじめとする近代建築が注目されることで、その多くを設計した葛西にも光が当たるようになった。建築はその姿形をもって、かかわった人たちや背景の物語を後世に伝えることができる。葛西が再評価の機運にあるのは、何はともあれ建築が残っているからで、その建築を残した盛岡市民の見識がいま、世界から評価されている。

旅の終わりに佐藤氏はこう語った。「愛知県犬山市の『博物館 明治村』を訪れた際、移築された帝国ホテル中央玄関などの名建築を一度に見られる楽しさを味わうとともに、建物がまち並みと調和しながら存在している盛岡の魅力をあらためて再発見しました。盛岡のよさが今後も失われることのないように祈っています」。最後のひと言は、盛岡を訪れた多くの人に通じる想いだろう。

MAP 1
05

旧南部家別邸

現・盛岡市中央公民館別館

竣工 | 1908年

設計 | 戸澤甚太郎　設計監修 | 葛西萬司

盛岡における洋風建築の始まり

書院造の近代和風建築に洋館を組み入れた建物で、東側に大規模な池泉回遊式庭園が広がる。設計は南部家出入りの大工棟梁の戸澤甚太郎、葛西萬司は設計監修に当たった。戸澤は小岩井農場の多くの建物を設計施工した戸澤組を率いた人物で、作庭は東京の日比谷公園や盛岡の岩手公園を手がけた長岡安平の手になる。葛西をはじめ当時の盛岡の建築関係者では最高の人物がかかわった建物といえる。

主屋の大屋根は寄棟の瓦葺き、外壁はささら子の下見板張りで和風だが、玄関の右側の応接室の外壁はドイツ下見板の洋風の造りだ。

式台のある格式の高い玄関から内部に入ると、庭側に2つの座敷がある。手前は謁見用の座敷、奥が執務室となる御座所で、どちらも床や違い棚、書院を備えた本格的な書院造だ。また、長押には鶴の彫金釘隠し、襖の引き手にも紋様のある金具を使うなど、細部まで趣向を凝らした意匠が見られる。

別邸を新しく建てることを決めたのは、盛岡藩最後の藩主・南部利恭（としゆき）の次男で、日露戦争で戦死した兄の跡を継いで南部家第43代当主となった利淳（としあつ）だ。廃藩置県後、南部家の本邸は東京に移り、盛岡での住まいは別邸となったが、行事などを行う際に手狭で、盛岡を訪れた皇族方の宿泊所の問題もあった。そこで利淳の意向により、明治維新後は荒れ果てたままだった御薬園跡に新たな別邸が建てられるに至った。現存するのはその接客空間で、住居部分は中央公民館として改築されたときになくなった。

1

2

3

4

1　外観は入母屋造。赤瓦葺き屋根の車寄せ部分が突き出て、妻飾りには懸魚や狐格子が見られる
2　洋室と座敷が廊下を挟んで隣り合う
3　洋風の応接室
4　2つの座敷はいずれも本格的な書院造

MAP 3
25

岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館

現・岩手銀行赤レンガ館

竣工｜1911年

設計｜辰野葛西事務所

東京駅に先行して完成、中央との同時代性を有する

旧盛岡銀行の本店行舎として、3年の歳月を要して落成。辰野金吾と葛西が東京駅を設計中に生まれた建物だ。煉瓦造の2階建て、一部3階建てで、床と屋根は木造、部分的に鉄骨を多用している。マンサード型の屋根は銅板葺きで、ドーム部分のみ天然スレート葺きとし、ドーマー窓を取る。

外壁は煉瓦の壁面に花崗岩の帯を回し、1階窓はまぐさ、2階窓にはアーチを用い、コンソールやアーチなどの要所にも白色花崗岩を使い、辰野式ルネッサンス様式の特徴をもつ。内部はロビーと営業室が吹き抜けで、2階に回廊が巡る。2階の各室は営業室を見下ろす吹き抜けに面したこの回廊で結ばれている。木製の飾り柱を用い、天井に石膏モチーフを施すなど、豪華な内装が明治期の銀行建築の姿をよく示す。

第九十銀行から派生した旧盛岡銀行は、明治後期には県内随一の銀行に成長した。1936（昭和11）年に岩手殖産銀行（現・岩手銀行）がこの建物を譲り受け、本店として利用。同行の新社屋完成後も中ノ橋支店として2012（平成24）年まで営業を続けた。1994（平成6）年には現役の銀行建築として初めて国の重要文化財に指定された。2016（平成28）年から現名称のもと、一般公開されている。

1 2階の回廊から見た吹き抜けの営業室。木製飾り柱のコリント様式柱頭や天井の漆喰飾り、入り口枠の彫刻など、様式的には簡略化されているが、重厚な雰囲気を演出
2 2階総会室。建物最大の会議室で、回遊通路分を室内に取り込んだため2カ所の出隅が生じた。出隅は板張り腰壁部では曲線をつけて人の流れをスムーズにし、一方天井との取り合いは角。この上下で違う形状を収めるためにメダリオンの装飾を左官仕上げで取り付けた
3 凸凹に富んだ外観。煉瓦の壁面を白色花崗岩のラインで強調
4 正面エントランスホール。ドーム屋根の八角塔の内部
5 南側の外観。矩形塔を配し、八角塔とともに出入り口としていた

1

2

3

4

5

1

MAP 3
26

旧盛岡貯蓄銀行

現・盛岡信用金庫本店

竣工｜1927年

設計｜葛西建築事務所

葛西が単独で設計した現役の銀行建築

主体構造は鉄筋コンクリート造の2階建てで、一部に中2階と中3階をもち、鉄骨造の屋上階は建物前面の重要な意匠を兼ねている。建物前面に力強く立ち上がる列柱、軒蛇腹の装飾、他にも古典的な意匠の装飾石彫で壁面を飾っているが、列柱の柱頭は古典様式にその類を見ない新しいものだ。建物全体の立方体を積み上げていくような構成も、20世紀初頭の近代建築の手法の影響が強いと見ることができる。

内部は当時一世を風靡したアール・デコの影響下にあると考えられ、営業室の柱頭の装飾や照明器具、2階各室のドアの色ガラス、天井ボーダーの石膏レリーフ紋様などにその傾向が表れている。また、ボイラー室を地下に設けたスチーム暖房やスチールサッシ、シャッター設備など、現代のビル建築のような設備を当初より整えていたことも特筆すべきだろう。

旧盛岡貯蓄銀行は戦時中に岩手殖産銀行に買収された。盛岡信用金庫は1958（昭和33）年にこの建物を同行から譲り受け、現在も銀行建築として使っている。盛岡市指定保存建造物。

2

3

1 アール・デコのデザインの傾向がよく表れている2階の重役室
2 1階の営業室。細部の意匠に葛西のデザイン力を見ることができる
3 外壁は煉瓦の外側に厚さ6cmの花崗岩を貼っている。屋根は陸屋根で、当時はモルタル防水だったと考えられている

MAP 1-2
12

盛岡聖堂孔子廟

竣工｜1936年

設計｜葛西田中建築事務所

和漢折衷の設計図を無償で提供

盛岡藩の藩校・作人舘に祀られていた孔子像を奉安する堂。葛西晩年の設計で、和漢折衷のデザインだ。市内の小高い山のリンゴ畑の一角で木々に隠れるように立つ。

作人舘では和漢一致の教育方針のもと、その象徴として大国主命と孔子を祀り、木製の孔子像は盛岡藩第15代藩主・南部利剛が京都でつくらせた。藩校の廃校により、孔子像は作人舘の助教・太田代恒徳の私塾で保管されたが、太田代が盛岡を離れることになり、弟子の瀬山陽吉に託した。瀬山はしばらく自宅内に保管していたが、聖堂建設会を立ち上げて寄付金を募り、南部家第44代当主・利英をはじめ旧南部領出身の名士たちが建立資金を寄付。葛西も無償で設計図を提供した。建設にあたっても村の人々や青年団員が勤労奉仕したという。

鉄筋コンクリート造で、この地で採れた御影石の台座、外壁に白漆喰が塗られ、銅板を張った方形屋根の下には鈴が吊るしてあった。「白亜の聖堂」として美観を誇ったが、戦時中に爆撃の標的にならないように塗られた煤の跡が残る。

現在は瀬山の子孫がこの聖堂を守る。孔子を祀る廟堂は全国に十数カ所あるが、中国風の意匠は珍しい。地元では「孔子さん」と呼ばれ、親しまれている。

1

2

1　木製の孔子像を奉安する聖堂内部。年に1度10月に開堂式が行われる
2　「日蔭山」という小高い丘の上に立つが、木立に隠れている。一部開けた先にはリンゴ畑。敷地は現管理者である瀬山家の私有地だが、外観の見学は可能（18ページのアクセスマップと注意点を参照）
3　和漢折衷の堂々とした立ち姿に葛西の意匠の幅広さを見ることができる

3

テーマ2

地域と結び付いた文学者 宮沢賢治の生涯をたどる旅

取材・文｜磯 達雄
写真｜小松正樹

詩集『春と修羅』や童話集『注文の多い料理店』を遺し、いまなお高い人気を誇る宮沢賢治。
岩手県内には、出生地である花巻や、学校に通った盛岡など、ゆかりの地が点在する。
それぞれの場所に賢治関連の展示施設があり、その多彩な活動をたどることができる。
同時にそれは、賢治が眺めた山、森、川、まちの風景を追体験する旅ともなるだろう。
地域と結び付いた文学者、宮沢賢治を深く知るために、盛岡からの建築ツアーへと出かけよう。

まずは盛岡市内から。宮沢賢治は、鉱物や植物の採集に熱中した少年時代を花巻で過ごすと、その後は親元を離れて盛岡へ。県立盛岡中学校を卒業して、1年の間をおき盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部、16ページ参照）に進学する。日本で最初の官立高等農林学校であり、その本部校舎は農業教育資料館として公開されている。賢治関連の資料を集めた一室もあり、学生時代の写真や文学同好会で遺した作品などとともに、土性調査の用具、採取した岩石、偏光顕微鏡用の標本なども展示していて、文学者である賢治の根底に、農学や地学の理系的知識があったことがわかる。

賢治は高等農林学校の研究生だったころから童話を書きはじめる。童話集『注文の多い料理店』が刊行されたのは、賢治が28歳の時。出版元は盛岡の光原社（17ページ参照）だった。同社は民芸品店として存続し、賢治の資料を展示するスペースも設けている。

これ以外にも盛岡市内には、もう一人の岩手県出身の著名な文学者である石川啄木と並べて展示を行うもりおか啄木・賢治青春館（10ページ参照）や、盛岡ゆかりの偉人の一人として賢治を顕彰する盛岡市先人記念館（21ページ参照）もあるので、時間の余裕があれば寄ろう。

雫石：雄大な風景と近代的な畜産農場

西へと移動して、雫石町へ。ここには日本の酪農と畜産を先導した小岩井農場（17ページ参照）がある。賢治は中学校の登山遠足の帰り道で初めて小岩井農場に立ち寄り、その後も幾度となくここを訪れた。童話や詩作の舞台にもなり、長編詩「小岩井農場」では、雄大な風景の中で行われる近代的な農場経営の様子が独特の言語感覚で描写されている。

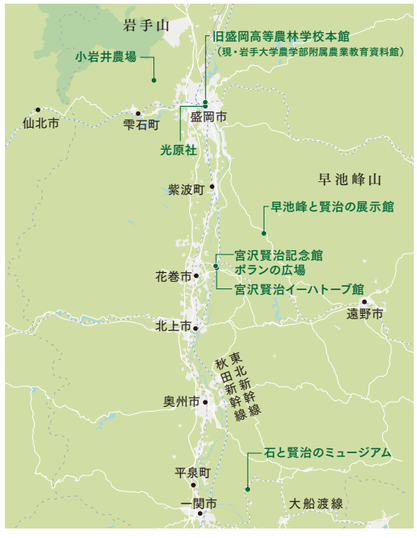
上丸牛舎のエリアには、国の重要文化財に指定された牛舎やサイロに囲まれて小岩井農場資料館があり、その中で賢治関連の資料も展示しているので見逃さぬよう。

花巻：生まれ故郷に幻の庭園デザインを再現

次は南下して、花巻市へ。ここは前述の通り、賢治の生まれ故郷だ。高等農林学校の研究生を修了した賢治は、一旦は東京へ出るものの、妹が病気との知らせを受けて帰郷。郡立稗貫農学校（のちに移管して県立花巻農学校）の教諭となった。

花巻市内には賢治関連の施設やスポットが多数ある。まずは胡四王山のエリアへ。ここには宮沢賢治記念館（16ページ参照）、宮沢賢治イーハトーブ館（16ページ参照）、宮沢賢治童話村、レストラン山猫軒と、4つの施設が集中する。必ず訪れたいのが宮沢賢治記念館だ。常設展示で賢治の活動や思想について、その全体像をつかむことができる。

その展示で、賢治が庭園のデザインも手がけていたことを知った。



宮沢賢治記念館、ポランの広場

宮沢賢治記念館（設計｜菅建築設計事務所／展示設計｜乃村工藝社／竣工｜1982年）の常設展示室では、中央で賢治の心象世界を映像により表現し、周囲では、科学、芸術、宇宙、宗教、農の5つの切り口から関係資料を整理して、賢治の全体像を解説する。近くにあるポランの広場では、賢治が花巻温泉遊園地のために設計した南斜花壇と日時計花壇を、残っている図面を元に再現している

旧盛岡高等農林学校本館（現・岩手大学農学部附属農業教育資料館）

賢治は中学を卒業後、この学校の農学科第二部（のちの農芸化学科）に首席で入学。卒業後も研究生となり、あわせて5年間を過ごす。地質や土壌の研究に勤しみながら、文芸同人誌に作品を発表していた。建物は1912年に竣工したもので、近くにある門番所・旧正門と合わせて、国の重要文化財の指定を受けた。建物内では農業教育関連資料のほか、賢治が遺した卒業論文、地質調査報告書、恩師への手紙など、貴重な事物を展示している（関連19、22ページ）

早池峰と賢治の展示館

賢治は土性調査や、早池峰山登山のために、現在は花巻市の一部となっている大迫町をたびたび訪れた。この記念館では、賢治と大迫町のかかわりを解説するほか、賢治が定宿にしていた旅館の一室を再現展示している。建物は1902年に建てられた稗貫郡役所を移築したもので、賢治の童話「猫の事務所」のモデルとも言われている

石と賢治のミュージアム

35歳になった賢治は、東北砕石工場の技師となり、農地の土壌を改良する石灰石粉の製品改良や宣伝、販売に取り組んだ。1924年の創業後、幾度ととなく建て増しを繰り返した工場建物は国登録有形文化財になっている。そのすぐ近くのミュージアムでは、賢治の作品にたびたび登場するさまざまな鉱物を標本を添えて解説する（設計｜三菱マテリアル、S&T ファイブステージ設計事務所、久慈設計花巻／竣工｜1999年）

宮沢賢治イーハトーブ館

宮沢賢治に関する図書、研究論文、芸術作品の収集、整理、公開を行う資料、情報、交流のセンターとして設けられた。展示室では賢治に関連したさまざまな企画展を行う。ホールは講演会や演劇などの催しに用いられるが、通常はアニメーション作品を上映している。喫茶コーナーでは、窓の向こうに賢治が親しんだであろう風景を味わいながらくつろぐことができる（設計｜古市徹雄・都市建築研究所／竣工｜1992年）

花巻温泉遊園地のために設計して実現したが、維持ができずに失われてしまったという。これを、残された資料をもとに再現した南斜花壇と日時計花壇が、記念館から下りていく斜面に設けられている（16ページ参照）。これもぜひ見ておきたい。

そのまま道を進んでいくと、宮沢賢治イーハトーブ館へ出る。賢治にまつわる企画展示を行うほか、ホールでは通常、賢治の童話をもとにしたアニメーション映画を上映している。喫茶コーナーもあるので、賢治も歩いた胡四王山の林の景色を楽しみながら、くつろぐのもいいだろう。

花巻市にはこのほか、中心部から少し離れたところに羅須地人協会や早池峰と賢治の展示館（16ページ参照）もある。前者は花巻農学校を退職した賢治が、農業と芸術を統合したユートピアを実現するべく私塾として設立したもの。建物は県立花巻農業高等学校の敷地内に移築復元されている。後者は、賢治が土性調査でしばしば訪れた地に設けられたもので、内部には賢治が泊まった旅館の部屋が再現されている。どちらも、賢治が地元の人からどれだけ愛されているかが伝わってくる。

一関：「石っこ賢さん」が最後に勤めた工場

さて、最後はさらに南の一関市へとたどろう。賢治は32歳のとき、過労がたたって病に臥す。3年後、ようやく回復すると、一関市東山町の東北砕石工場の技師の職に就いた。この地域では石灰石が産出され、それをもとに土壌改良剤となる石灰石粉を製造する工場だった。製品は小岩井農場でも使われた。工場の建物は増築を繰り返しながらも存続し、遺構として公開されている。

隣接して設けられた石と賢治のミュージアム（16ページ参照）では、子どものころから岩石採集が好きで、「石っこ賢さん」と呼ばれた賢治と石のかかわりをテーマに展示を構成している。

賢治は石灰製品の宣伝のため、上京した際に再び発病。病床で文語詩や俳句に取り組むものの回復ならず、37歳の生涯を終える。

ひとりの文学者の人生とその作品が、これほど特定の地域と結び付いている例は、他に思い浮かばない。宮沢賢治の建築ツアーは、同時に岩手県の地理や歴史を知る旅ともなるのであった。

磯 達雄　いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988–1999年日経アーキテクチュア編集部に勤務。2002年–2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学、早稲田大学芸術学校非常勤講師。

小岩井農場

賢治が中学校の遠足以来、幾度となく訪れ、詩作や童話の舞台として取り上げた小岩井農場は、日本鉄道会社副社長の小野義眞、三菱社社長の岩崎彌之助、鉄道庁長官の井上勝の3名により1891年に開設された日本最初期の本格的な洋式農場。賢治の作品に登場する本部事務所（竣工1903年、下写真）、一号牛舎（1934年、上写真）など、21棟の建物が国の重要文化財に指定されている。一般に向け開放されているまきば園内には、小岩井農場重要文化財ギャラリーがある。また小岩井農場資料館では、賢治関連の資料も展示する

光原社（こうげんしゃ）

賢治による童話集『注文の多い料理店』の発行を引き受けたのは、盛岡高等農林学校の後輩にあたる及川四郎だった。出版社名の「光原社」は賢治が名付けたものである。その後、出版の事業から離れ、民芸品を扱う店舗に変わった。建物は工芸研究家の伊東安兵衛と工芸店舗作家の秋山正が概略設計を行い、実施にあたっては店主の及川自身が意を注いだ。通りに面した店の脇を抜けると、細長い中庭に面して賢治資料の展示室や喫茶室などが並んでいる(関連19、22ページ)

盛岡建築めぐり
MORIOKA

南部盛岡藩の城下町であり、街道が集まる岩手随一の経済都市盛岡。明治維新後、武家屋敷の多くが取り壊され、そこに学校や官庁などの洋風建築が建っていった。点で挿入された近代建築のまわりに、伝統町家が並んでいるのが経済成長期までの盛岡の風景だ。

城下町の基本構成は3つの壕（曲輪・くるわ）。中心の「内曲輪」内が盛岡城で、現在盛岡城跡公園。2番目の「外曲輪」内側は官庁街で、明治期の近代建築が立ち並んだ。岩手県公会堂、岩手県庁、そして宮沢賢治出身の盛岡中学校（現・盛岡第一高等学校）、岩手病院（現・岩手医科大学）など。壕の一部は北上川、中津川が利用されていた。中津川の外側は下町で、紺屋町、肴町などの町名がいまも残る。その下町の中心を奥州街道が貫いていたが、近代に金融街となって銀行建築が点在した。岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館、旧盛岡貯蓄銀行、旧第九十銀行本店本館などがそうだ。この通りには莫産九・森九商店、釜定など町家もわずかに残っている。

北上川の舟湊、奥州街道、遠野街道、宮古街道の結節点にあたるのが、鉈屋町。近年の保存運動で町家などの歴史的景観が保存されている。盛岡の町家は店と奥の座敷の間に常居（じょい）という吹き抜けになっている主人の仕事場があるのが特徴。旧酒蔵を改修した「もりおか町家物語館」で見学できる。岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館が面している中ノ橋通りは新たな開発が注目されており、盛岡バスセンターのリニューアルは話題になった。盛岡駅近くの北上川河畔では、木伏緑地にPark-PFIを利用したコンテナ型カフェやレストランが生まれている。

写真｜小松正樹（特記以外）

参考

- 『SD』鹿島出版会、1991.9
- 『圓堂建築設計事務所作品集』円堂建築設計事務所、1981
- 『近代建築』近代建築社、1978.8、2023.6
- 建築思潮研究所 編『建築設計資料028 記念展示館』建築資料研究社、1990
- 『建築文化』彰国社、1965.7、1980.10、1983.8
- 後藤治・二村悟 編著『水と生きる建築土木遺産』彰国社、2016
- 佐藤竜一 著『建築家・葛西萬司』日本地域社会研究所、2023
- 『住宅建築』建築資料研究社、2002.11
- 『新建築』新建築社、1959.1、1968.2、1968.9、1973.6、1981.1、1990.8、1992.12、1994.11、2000.3、2006.7、2022.3、2023.1
- 『第49回 盛岡市先人記念館企画展 葛西萬司』盛岡市先人記念館、2013
- 谷口吉郎 編『記念碑散歩』文藝春秋、1979
- 藤島亥治郎 監修、綜芸文化研究所 編『藤島亥治郎百寿の歴史』藤島亥治郎先生の百寿をお祝いする会、1999
- 藤島亥治郎 著『藤島亥治郎米寿の歴史』1986
- 文化科学研究所 編『地域創造』地域創造、第36巻、2014
- 文化庁 国指定文化財等データベース（https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index）2024.6.10アクセス
- 盛岡市ホームページ「歴史・先人」「都市整備に関する計画」（https://www.city.morioka.iwate.jp/）2024.6.7アクセス
- もりおか歴史的建築物まち並み探訪ガイドブック編集委員会 編『もりおか歴史的建築物まち並み探訪ガイドブック』いわてNPOフォーラム21、2013
- 米山勇 監修『日本近代建築大全：東日本篇』講談社、2010
- 渡辺敏男 著『盛岡市文化財シリーズ第42集：盛岡の洋風建築』盛岡市教育委員会歴史文化課、2014

おことわり
04–23ページの作品名称は文化財指定・登録名称とし、
ほかは原則として2024年6月時点の施設名称を使用しています。

01
岩手県営武道館
設計｜アトリエ・K　竣工｜1990年　みたけ3–24–1

日本大学で長らく教鞭をとった小林美夫の設計による、弓道場、相撲場、大道場など大小10棟に及ぶ建築からなる総合武道館。軒の出が深い勾配屋根は、厳しい風雪から外壁を守り、山並みのような風景を創出している。構造設計は、岩手県営体育館（MAP 02）も担当した斎藤公男が担当。ここでは、張弦梁構造を採用しており、この構造形式がもたらす懸垂線が、むくれた屋根と天井の形に現れている。「武道のもつ高い精神性に相応しい伝統的風格の追求」（『新建築』新建築社、1990.8）がされ、庇先端に施した雪落としのデザインや、矢羽を連想させる客席の手すり子など細部のディテールも美しい

02
岩手県営体育館
設計｜日本大学 小林美夫研究室
竣工｜1967年　青山2–4–1

1970年に開催された第25回国民体育大会開催にあわせて建設された体育館。竣工から60年近くになるが、細やかな維持管理がなされ、平日、休日問わず利用者が絶えない。見どころは設計者が「アーチとサスペンションによる、圧縮と引張りの明快な構成から帰納される空間」（『新建築』新建築社、1968.2）と語る、建物中央を貫くスパン約70mの2本のメインアーチと外周のリングアーチ、ケーブルネットによる構造形式だ。構造設計は日本大学の斎藤謙次研究室で、斎藤公男も担当の一人。最寄りのIGRいわて銀河鉄道・青山駅では、名所や名物をイラストで表した駅名標に、この体育館が選ばれている。日本におけるDOCOMOMO選

03
盛岡市立図書館
設計｜久慈一戸建築事務所
改修設計｜白浜建築設計事務所（基本設計）、久慈設計（実施設計）
竣工｜1971年
改修｜2024年
高松1–9–45

高松の池のそばに立つ市立図書館。約2年間休館して、耐震補強のほかエレベーターの新設やバリアフリー化、内部のレイアウトを一新するなど大規模改修を実施。間仕切りをできるだけなくした開放的な閲覧室、盛岡の工芸品などを展示したエントランスホールや飲食可能なスペース、絵本や児童書の並ぶ「こどもライブラリー」を設けるなど、より魅力ある施設に生まれ変わった。外壁は竣工時と同じ工法で仕上げ直し、カウンターや椅子、テーブルなどの家具も手入れをしてほぼ再利用している。池を望む窓際に新たにしつらえた読書スペースは、春には桜が眼前に広がる利用者に人気の場所だ

04
愛宕山記念公園展望台
設計｜藤島亥治郎　竣工｜1962年（No.1）、1994年（No.2）
愛宕下1–51 外

盛岡市街地北部に隣接する、標高196mの愛宕山に立つ展望台。設計は、盛岡出身の建築史家であり、建築家として四天王寺の発掘・伽藍の復元、平泉の遺跡・文化財の保存整備などを行った東京大学名誉教授の藤島亥治郎が手がけた。野村東太とともに設計したNo.1は、特徴的な半円馬蹄形の姿はいまと変わりないが、屋根のアーチがゆるく、軒の出も浅く、より軽やかな印象だ。No.1の老朽化をうけて、現在の展望台（No.2）を再び設計（実施設計：久慈設計）。手がけたのは、藤島が90歳半ばにしてのこと。『藤島亥治郎百寿の歴史』には、完成した展望台の階段に立つ藤島の写真が掲載されている

05
▶p.11参照
旧南部家別邸（現・盛岡市中央公民館別館）
設計｜戸澤甚太郎
設計監修｜葛西萬司
竣工｜1908年
愛宕町14–1

06
アイーナ いわて県民情報交流センター
設計｜日本設計・曽根幸一環境設計研究所・久慈設計共同企業体
竣工｜2005年
盛岡駅西通1–7–1
JR盛岡駅西口に隣接して立つ、県立図書館やホール、パスポートセンター、運転免許センターなどの施設が集積した複合施設。駅西口広場に対して弓型に湾曲する透明なファサードは、内と外に軽やかな印象を生む。雛壇状に奥へ奥へと連続するエレベーターを内包したアトリウムが圧巻だ。このアトリウムを介して、施設の性格に応じて3層にゾーニングされており、またアトリウムのドラフト効果を利用した自然換気を行っている。アーティストによるアートワークや藤江和子による建築家具も見どころだ。ガラス越しに見通す図書館も面白い。第40回 SDA賞（A-2入選）ほか受賞

07
盛岡市先人記念館
設計｜圓堂建築設計事務所
竣工｜1987年
本宮蛇屋敷2–2

明治期以降に活躍した盛岡ゆかりの130人の先人を顕彰し紹介する記念館。寄棟の頂点に採光窓をもつ、変形した2つの方形屋根が特徴的だ。1階は、国際交流に尽力した新渡戸稲造、海軍大臣として国政を担い戦争終結に導いた米内光政、アイヌ語研究の第一人者である金田一京助の3名の展示室で構成。アーリー・アメリカン調、透明感ある白大理石やガラス、自宅の書斎の一部を再生・復元するなど、それぞれの人格や風貌が展示空間に投影されている。先人たちの胸像レリーフを中央に据えた2階の総合展示室では、先人の業績を分野別に紹介。建築空間と展示計画が緻密に計画された建築だ。第29回 BCS賞受賞

08
原敬記念館
設計｜谷口吉郎
改修設計｜谷口吉郎（第一次増築）、山添 勝（第二次増築）
竣工｜1958年
改修｜1973年（第一次増築）、1988年（第二次増築）
本宮4–38–25

爵位をもたない初の平民首相として、「平民宰相」と呼ばれ国民から親しまれた原敬。原の遺品を収集保存するため原の生家の敷地に建てられた顕彰施設だ。建設には、多くの関係者が尽力した。施工を請け負った鹿島建設は、当時の会長・鹿島守之助が、義父・鹿島精一と原とのかかわりが深かったことを受け、「予算的に極めて窮屈な金額」の依頼を承諾。設計の谷口吉郎は一度は依頼を保留したものの、依頼者の原に対する強い敬慕の情に心動かされ設計にあたった。もとの木々や母屋をできるだけ保存しながら計画されたアプローチや建築に心が洗われる。記念館前に立つ原の句が刻まれた石碑も谷口の設計による

09
IBC岩手放送 本社
設計｜坂倉準三建築研究所（スタジオ棟、事務棟）
竣工｜1964年（スタジオ棟、事務棟）
志家町6–1

IBC岩手放送がラジオ放送を開始したのは1953年のこと。当時、盛岡市内丸にあった社屋を1964年に現在の地に移転。坂倉準三建築研究所の設計で、彩色タイルに覆われた円形のラジオ棟（竣工時名称：スタジオ棟）と、直線で構成された業務棟（竣工時名称：事務棟）が建てられた。その後、これら2棟の裏手にテレビセンター棟（1986年）、デジタルセンター棟（2005年）を増築。特徴的なラジオ棟を覆っていた彩色タイルは、2013年に塗装に変更されたが、その一部をいまも目にすることができる

10
旧・葛西荘（現・IBC岩手放送 本社庭園）
設計｜葛西萬司（邸宅）　竣工｜1921年　志家町6–1

IBC岩手放送が立つ敷地は、葛西萬司に縁がある。葛西萬司の養父・葛西重雄の邸宅「葛西荘」があった場所なのだ。当時の広さは約2500坪。残念ながら萬司が設計した邸宅は解体されたが、重雄自ら指示して全国から樹木や庭石を取り寄せ造園にあたった庭園の一部が社屋裏手に残っている。庭園中央を占める樹齢160年を超す枝垂桜と、社屋正面に立つ同社のシンボルでもある樹齢140年を超えるサイカチの木も、ここが葛西荘であったときから立っていると推察される。庭園には毎春、カモの親子が姿を見せるという。歴史に思いを馳せながら、庭をめぐってみたい

11
鹿島精一記念展望台
設計｜鹿島建設　竣工｜1962年
川目第19地割
鹿島建設の前身、鹿島組2代目組長を務めた鹿島精一。精一が愛したのは故郷・盛岡だった。在京の岩手県人会を支援し、故郷の若者に奨学金を支給したりもした。展望台は、精一の長女・卯女と結婚した鹿島守之助が、精一の故郷・盛岡に記念になるものをと発案して1962年に建設し、盛岡市に寄贈されたものだ。2018年には同社の寄付を受けて改修工事を実施。標高340メートルの岩山の上に立つ円盤状の展望台からは、盛岡市街地、岩手山、姫神山・早池峰山の北上山地の山々まで望める。散策の途中に、ぜひ立ち寄ってほしい。展望台からの夜景は「日本夜景遺産」「夜景100選」に選定。平成30年度 盛岡市都市景観賞受賞

12 ▶p.14参照

盛岡聖堂孔子廟
設計｜葛西田中建築事務所
竣工｜1936年
東中野日蔭山44

13 ▶p.16参照

旧盛岡高等農林学校本館（現・岩手大学農学部附属農業教育資料館）
設計｜谷口 鼎（旧文部省 営繕組織 技手）
改修設計｜〈盛岡〉設計同人（渡辺敏男）
竣工｜1912年　改修｜1994年
上田3–18–8

14 ▶p.17参照

光原社（こうげんしゃ）
概略設計｜伊東安兵衛、秋山正
実施設計｜及川四郎、山口儀兵衛（山口工務店 棟梁）
竣工｜1937年（主店舗）。以降、順次増改築
材木町2–18

15

ジャーランビル
設計｜宣卓／設計・計画PLAN　竣工｜1999年
盛岡駅前通り9–3
盛岡冷麺・ぴょんぴょん舎を展開する中原商店の飲食施設が入る商業ビルで、1階から3階に焼肉・冷麺店、4・5階にカフェレストランが入る。設計は、谷口建築設計研究所出身の宣卓による。「強く自己完結した他を寄せ付けない閉じた表現にならないようにする」「外観の表現にぬくもりを与えるために、ガラス面を石の面より下げることで陰影を強調し、ディテールを繊細にしすぎない」（『新建築』新建築社、2000.3）など、外壁の温かみのあるライムストーンや巧みな開口デザインによって、盛岡駅前のまち並み形成に寄与している

16

木伏（きっぷし）
設計｜ビルススタジオ　竣工｜2019年
盛岡駅前通11–11

2017年に都市公園法が改正され、民間が主体的に公園事業を行えるようになった。盛岡駅から徒歩約5分ほどの北上川沿いの「木伏」は、その先例だ。以前は、芝生と植栽がほとんどなく、インターロッキングが敷き詰められた人を寄せ付けない空間だったという。そこでそれらを撤去したうえで芝生の広場を再整備し、コンテナを使った店舗棟とそれらをつなぐウッドデッキを新設。公衆トイレの整備は行政が、その清掃や光熱費などの維持管理は民間が負担して、投資回収できるスキームを組み上げた。駅近でありながら、1店舗あたりの面積を抑えることで地元資本の飲食店の出店機会を創出し、公園管理の課題を解決する「都市公園の事業化」を実現している

17

旧・岩手カトリックセンター四ツ家教会（現・カトリック四ツ家教会）
設計｜ヘルベルト・オーベルホルツァー＋山添建築設計事務所
竣工｜1978年
本町通2–12–25
四ツ家教会が現在地に建立されたのは1880年のこと。彫刻家の舟越保武もここで洗礼を受けた信徒の一人だ。現在の聖堂は、スイス人建築家の原案をもとに、地元出身の建築家と信徒の建設委員会によって実施案を作成したもので、Y字型の平面構成が特徴だ。「使徒信条」を描写したステンドグラスや、高窓から降り注ぐ自然光が聖堂に静謐をたたえる。鐘楼の鐘は、石川啄木や宮沢賢治の作品にも登場する。なお、1912年につくられたゴシック風の旧聖堂は移築され、盛岡大学細川泰子記念礼拝堂として保存活用されている。第1回 東北建築賞作品賞部門 佳作

18 ▶p.08参照

岩手病院診療棟（現・岩手医科大学1号館）、岩手医学専門学校附属医院（現・岩手医科大学2号館）
設計｜葛西建築事務所　竣工｜1926年（岩手病院診療棟）、1932年（岩手医学専門学校附属医院）　内丸19–1

19

三田商店本社
設計｜圓堂建築設計事務所　竣工｜1968年　中央通1–1–23

1894年に産業用火薬の販売を目的に創業した総合商社・三田商店の本社社屋。盛岡市先人記念館と同じく、圓堂政嘉の設計だ。2014年の改修工事で内部は一新。建物中央にあった入り口を西側に移設したが、彫りの深い低層部のアーチ、階段を収めた円筒のボリュームなど、外観はほぼ竣工当時の姿をとどめる。創業者の三田義正は、私立岩手病院や岩手医学専門学校を経営した三田俊次郎の実兄。実弟への援助で岩手の医学界発展に尽力し、人材育成を目的とした奨学会の設立、また南部土地株式会社を設立し市街地の整備にもあたった人物でもある

20

岩手県庁舎
設計｜山下寿郎設計事務所　竣工｜1965年　内丸10–1

知事局棟（地下1階、地上12階、塔屋3階）と議会棟（地上2階、一部3階）の2棟から構成される県庁舎。「建築当時、東北で1番、全国でも2番目の高さのマンモス庁舎であった。これは、庁舎を高層化することにより、限られた面積を将来にわたって有効に活用するために工夫されたものである」（岩手県庁HPより）。知事局棟の構造形式からくる長手方向と短手方向の意匠の対比も面白いが、せりあがるようなバルコニー、6本の独立柱からなる正面玄関車寄せの庇なども、ぜひ近くでも見てもらいたい

21 ▶p.09参照

岩手県公会堂
設計｜佐藤功一　竣工｜1927年　内丸11–2

22

トーサイクラシックホール岩手（岩手県民会館）
設計｜佐藤武夫設計事務所
竣工｜1973年
内丸13–1
県知事公舎敷地を建設地として建てられた多目的ホール。窯変タイル張りの外壁を見つつ中に入ると、南部鉄器と鏡を用いたシャンデリアが輝く、大理石張りのグランドホールが広がる。このグランドホールは、大ホールへとつづく階段状のホワイエでもあり、訪れた者の高揚感を高める。開館以来、丁寧に維持管理を続けてきた。「何年か後にはホールの吊り天井の改修も考えねばなりませんが、この建築、空間と音響を大切にしたい」（業務管理課 関成雄課長）。ホワイエの橋本八百二の原画による壁面レリーフや、建物角地に立つ彫刻家・舟越保武によるブロンズ像も見どころだ。第5回 JIA25年賞ほか受賞

23

紺屋町番屋
設計｜不詳　改修設計｜角館稲葉設計事務所
竣工｜1913年　改修｜2021年
紺屋町4–34
消防組第四部事務所として建築された建物で、2005年に消防屯所としての役目を終えたのち、地元の熱心な保存活動を経て2015年に市に寄付。耐震・改修工事を経て、民間事業者の運営による交流・体験施設としてリニューアルオープンした。2階の床材は1階の天井に再利用。花崗岩の石畳や窓枠、窓ガラスは往時を偲ばせる。また建物を80cmほど曳屋した際に出てきた、基礎のゴマ石も入り口まわりに再利用している。「完成後、みなさんから“ありがとう”と言われて驚きました。消防団の活動もこの建物も、地域の人に支えられ、愛されてきたものなんです」（利活用事業者「ほっぷステップ」岩渕公二 代表）。一帯のシンボルとして、これからもまちを見守りつづける

24

旧・岩手県立図書館（現・もりおか歴史文化館）
設計｜菊竹清訓建築設計事務所
改修設計｜三衡設計舎（基本設計）、久慈設計（実施設計）
竣工｜1967年　改修｜2011年
内丸1–50

市内に3つあった菊竹建築のうち、唯一残るのが、この建築だ。2005年に図書館機能が移転したのに伴い、全面改修と増築をし、歴史・文化の情報発信施設として再オープンした。「施設機能の変更について、菊竹先生から新陳代謝をもって変えてくれるのはうれしいと言っていただけた」（太田 主任学芸員）。ハイサイドライトは展示・収蔵品を直射日光から守るためふさいだが、岩手山をイメージした大屋根や、彫刻家・舟越保武の棟飾りは以前のままだ。気軽に立ち寄れるようにと入り口を複数箇所設け、建物を囲んでいた樹木や塀の一部も撤去した。東日本大震災の年に開館、その後、コロナ禍を経て、多くの来館者でにぎわう

25 ▶p.12参照

岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館（現・岩手銀行赤レンガ館）
設計｜辰野葛西事務所
竣工｜1911年
中ノ橋通1–2–20

26 ▶p.13参照

旧盛岡貯蓄銀行（現・盛岡信用金庫本店）
設計｜葛西建築事務所
竣工｜1927年
中ノ橋通1–4–6

27 ▶p.10参照

旧第九十銀行本店本館（現・もりおか啄木・賢治青春館）
設計｜横濱 勉
改修設計｜〈盛岡〉設計同人（渡辺敏男）
竣工｜1910年　改修｜2002年
中ノ橋通1–1–25

28

盛岡バスセンター
設計｜西村浩＋林隆育／ワークヴィジョンズ　竣工｜2022年
中ノ橋通1–9–22

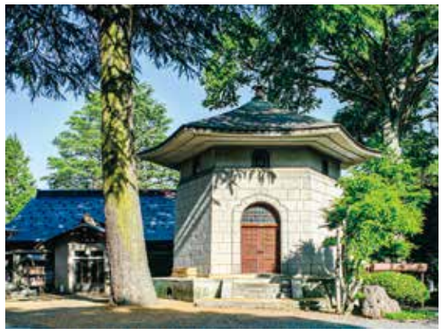
1960年に供用が開始され、老朽化のため解体された盛岡バスセンターの跡地に立つ、民間主導の公民連携事業として整備された複合施設。商店街や飲食店、さらに岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館や旧盛岡貯蓄銀行など歴史的建造物が集積する一角にある。「人と地域の魅力をつなぐLocal Hub」をコンセプトに、以前の名称を引き継ぎ生まれ変わった施設には、バスターミナルのほか、宿泊施設、地元市民も立ち寄れる温浴施設、盛岡の食をたのしめるフードホールやマルシェなど、地域の魅力発信に寄与するコンテンツが加わった。旧バスセンターで使われていたロゴ看板やソファの生地を張り替え再利用するなど、この場所の記憶も引き継いでいる

29

大慈寺 山門
設計｜不詳
竣工｜1905年
大慈寺町5–6
城下町盛岡の風情が残る鉈屋町・大慈寺町界隈の一角に、深い木立に囲まれて1673（寛文13）年創建の大慈寺がある。大陸風と和風の趣をあわせもつ山門が目にとまるだろう。その足元の敷瓦も美しい。 この山門は、1883年の火災により類焼したのち、原敬の篤志により庫裏などとともに新築されたものだ。その後、1970年に山門の屋根の葺き替えと漆喰の塗り替え、土塀だった袖壁を築地壁にする改修が行われ、いまに至る。原敬の菩提寺でもあり、遺言によりこの墓所に眠る。景観重要建造物

30

大慈寺 宝物庫（現・経蔵）
設計｜葛西建築事務所　竣工｜1927年
大慈寺町5–6



山門をくぐり境内に足を進めると、右手に六角形の建物が見える。原敬が買い求めた経典を納めるためにつくられた鉄筋コンクリート造の宝物庫で、その設計には葛西萬司があたった。薄い銅板で縁取られた軒先や、軒裏にも細やかな仕上げがなされている。盛岡聖堂孔子廟より早い時期に手がけたものであり、聖堂とあわせて見ておきたい建築のひとつだ

31

もりおか町家物語館
設計｜不詳　改修設計｜三衡設計舎
竣工｜江戸後期から昭和初期　改修｜2012年　鉈屋町10–8

元酒造会社が使用していた建物群を再利用して誕生した観光文化交流施設。盛岡特有の町家構造「盛岡町家」を体験できる母屋のほか、江戸から昭和期に建てられた酒蔵や土蔵、計4棟が、物販やイベントスペースなどに生まれ変わり、鉈屋町界隈の散策の拠点として賑わいを見せている。この施設も含め一帯に歴史的まち並みが残るのは、都市計画道路事業をきっかけとした歴史的景観の保存活用運動があったからだ。地域住民を中心に、建築家・渡辺敏男と「盛岡まち並み塾」を設立。勉強会やイベントを行うなど運動の輪を広げ、やがて行政も一体となった官民協働によるまちづくりが進められている。配布されている散策ルートマップを手に巡ってみよう